様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２７１０４
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３９４４

研究課題名（和文）大腿骨骨折を経験した女性高齢者に対する支援モデルの検討

研究課題名（英文）A Study of Support Model for Elderly Female Patients with Hip Fractures

研究代表者
畑　香理（Hata, Kaori）

福岡県立大学・人間社会学部・講師

研究者番号：９０６２５３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大腿骨骨折を経験した女性高齢者に対して医療ソーシャルワーカーが行う効果的な退院支援を検討し、その方法を提案することである。本研究の成果として、高齢の大腿骨骨折患者の生活全体における変化を捉えるシステム思考やエコロジカルな視点に基づき、ストレングスを発揮するための取り組みをソーシャルワークの考え方及びプロセスに沿って明らかにできた点にある。また、大腿骨骨折を経験した高齢者に対して医療ソーシャルワーカーが行う退院支援のソーシャルワーク実践モデルを作成し、高齢女性患者への効果的な支援とその方法を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義として、高齢化率上昇と共に増加している高齢の大腿骨骨折患者に対して、患者のニーズや支援方法が把握できる点は社会的意義がある。また、これまで研究が進められていなかった当事者へのソーシャルワーク実践に関しても新たな知見を示せた点は学術的に意義のあることだと言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the effective discharge support provided by medical social workers to elderly women with hip fractures and to propose methods of support. The outcome of this study was to clarify efforts to demonstrate strengths in line with social work concepts and processes, based on systems thinking and an ecological perspective that captures the overall changes in the lives of elderly patients with hip fractures. In this study, I created a social work practice model for medical social workers to provide discharge support to elderly patients who have experienced hip fractures and was able to present effective support and methods for elderly female patients.

研究分野：社会福祉学

キーワード：退院支援　医療ソーシャルワーカー　大腿骨骨折　高齢者　女性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、大規模なコホート研究では日本の骨粗鬆症患者は約 1,300 万人に上るとされ、骨粗鬆症により大腿骨骨折をきたす人は ADL の低下はもとより QOL の低下も引き起こす。近年の大腿骨骨折の発生状況に着目すると、2012 年の新発生患者数は約 17 万 5,700 人であり、25 年間増加しているが、これは高齢化率の上昇によるものとされている（八重樫 2015）。先行研究では、大腿骨骨折を呈した高齢者の歩行機能が低下するなど、ADL 低下が指摘されている（坪井ら 2004）。また、遠藤ら（2015）は骨粗鬆症性骨折の危険因子として、「女性」「高齢」「低骨密度」「既存骨折」があるとした上で、二次骨折予防の取り組みがほとんど行われていないことを指摘している。高齢者の骨折では、骨折後の身体活動性の低下や疼痛に加えて、精神面での健康状態も悪化することが多い。日本は、超高齢社会に突入しており、2025 年問題への対応として地域包括ケアシステム構築が推進されているが、高齢者及び大腿骨骨折患者が受傷後も安心して在宅生活を送れるよう、入院中から退院後の生活を見据えて支援を行うことが重要となる。そこで期待されるのが、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）の行う退院支援である。

先行研究によると、退院支援は MSW の中心的業務であることが指摘されている（小原 2004）。加えて、研究者が 2008 年に実施した調査によると、回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）から自宅へ退院した高齢者の約 6 割が MSW へ退院に関する相談を行ったことが明らかになっている。「回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書」（一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会 2018）によると、社会福祉士が配置されている病棟は 93.2%であり、およそ 7 割の回復期病棟において患者が在宅復帰している。

以上のように、回復期病棟では在宅復帰に向けた退院支援が活発に行われていることがうかがえるが、これまでに回復期病棟を中心としたソーシャルワーク実践に関する研究は少ない。また、大腿骨骨折患者に関する先行研究は、医学、看護学、リハビリテーション科学等の視点から言及された研究がそのほとんどであり、高齢女性の大腿骨骨折患者に焦点を当てた退院支援に関する研究や、ソーシャルワークの視点から大腿骨骨折患者及び大腿骨骨折の経験者に対する生活上の支援の方法・効果等を取り上げた研究は見当たらない。

そこで、本研究では患者が在宅へ移行する際に MSW が行う効果的な退院支援を探究し、大腿骨骨折患者のあらゆる不安軽減に努めることを念頭に置き、大腿骨骨折を経験した女性高齢者が安心して在宅生活を送るにはどのようなソーシャルワーク実践が効果的かを検討することを研究課題とした。

２．研究の目的

本研究の目的は、大腿骨骨折を経験した女性高齢者に対する MSW が行う効果的な退院支援を検討し、その方法を提案することである。目的を達成するために、以下の点に取り組んだ。

まず、大腿骨骨折を経験した高齢者の具体的な在宅生活を把握することで、退院後の生活に必要な支援とその課題を検討することとした。具体的には、研究者がこれまで行ってきた基礎的研究をベースに、大腿骨骨折を経験して在宅生活を送る高齢者に対し、入院中から在宅生活に至るまでに体験した不安や生活の困難さなどを聞き取ることで、大腿骨骨折を経験した高齢者の生活と、入院中から在宅生活に至るまでの生活課題の特徴等を明らかにすることにした。

次に、上記の研究結果を踏まえて、大腿骨骨折を経験した高齢者への支援方法を整理し、退院支援におけるソーシャルワーク実践のモデル化を行うこととした。特に、女性高齢者への支援のポイントの整理に重点を置いた。また、回復期病棟に勤務する MSW へ大腿骨骨折患者に係る退院支援プロセスを聞き取り、支援のポイントを検討することにした。

以上の研究内容を踏まえて、地域包括ケアを中心とした地域づくりの中で必要とされる MSW による退院支援方法の提案を行うこととした。

３．研究の方法

本研究では、大腿骨骨折を経験した 65 歳以上の高齢者を対象にインタビューを行った。インタビューでは、受傷時から退院後の自宅生活までを時系列に尋ね、①入院中に感じた不安な点、②退院後の在宅生活について困難に感じる点を自由に語ってもらえるようにした。分析方法は、佐藤（2008）の質的データ分析法を参考にした。分析では、逐語録化したインタビューデータの定性的コーディングを行い、比較分析を繰り返し、コードを生成した。次にコード間を比較分析して概念的カテゴリーを作成、概念モデルを構築した。

次に、退院支援におけるソーシャルワーク実践モデルを検討するため、先行研究及び上記調査内容に基づいて構成要素を整理し、モデルの全体像と実践マニュアルを作成した。また、回復期病棟に勤務する MSW を対象にインタビュー調査を実施し、大腿骨骨折を経験した高齢女性患者に係る支援のポイントを整理した。

４．研究成果

大腿骨骨折を経験した高齢者へのインタビュー調査の分析から、当事者の生活の特徴につい

て、【療養生活に伴う精神的負担】【回復への意欲】【治療終了後も続く大腿骨骨折による負担】【安心した生活が確保された自分らしい暮らしの獲得】という 4 つのカテゴリーに分類できた。これらカテゴリーの内容を踏まえて、当事者の生活課題とストレングスを時系列に整理した（図1）。なお、図内の矢印は各カテゴリーの関連性を示したものである。

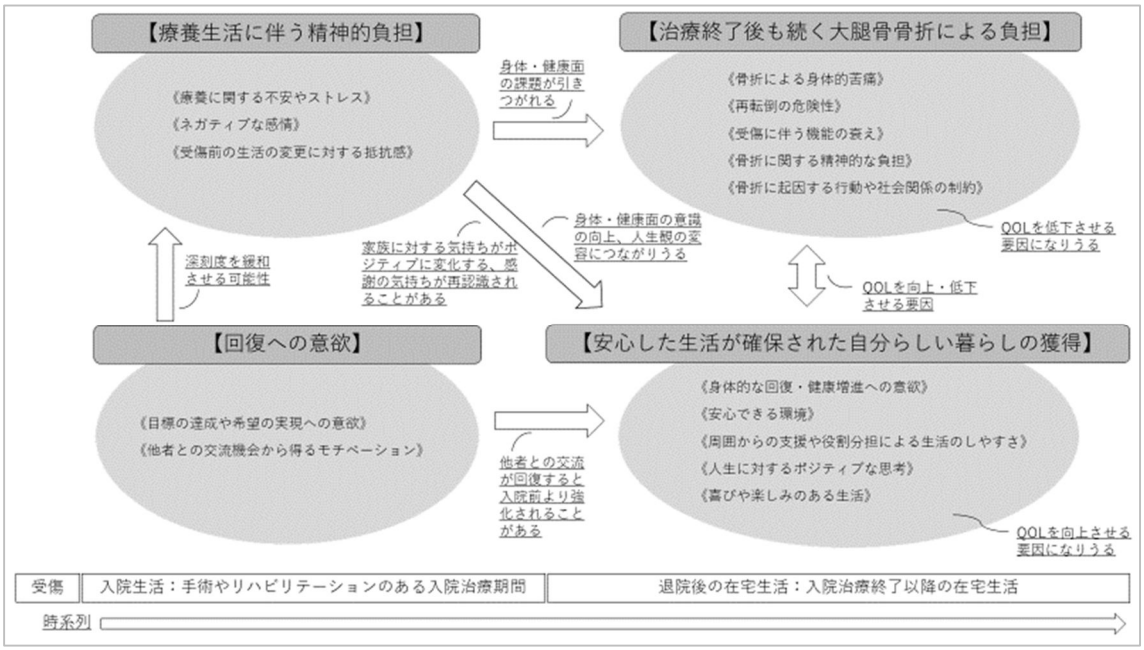

図１　入院から退院後の在宅生活における時系列的展開

本調査から得られた成果として以下 6 点が挙げられる。

第一に、入院中の大腿骨骨折患者の療養生活では、退院後の生活を見据えることで生起する意欲や、他者との交流が与える影響により、当事者が抱える課題の深刻度を緩和させる可能性がある。第二に、入院中の療養生活における身体・健康面での課題は、退院後の在宅生活において身体的回復や骨折に係る様々な経験を通じて、身体・健康面の意識の向上と人生観の変容へつながりうる。第三に、退院後の在宅生活では、家族への感謝の気持ちが再認識もしくは増幅されることがある。第四に、家族からの行動制限に係る意見や再転倒への恐怖によって QOL の低下が引き起こされることについては先行研究との一致が見られた。新たな知見としては、入院中の療養生活と退院後の在宅生活における課題について、身体・健康面では質を変えながら課題が引き継がれている。第五に、入院生活から在宅生活へと移行することで、それまで制約のあった他者との交流が回復し、入院前より強化されることがある。第六に、退院後の在宅生活において、大腿骨骨折を経験した高齢者が抱える課題よりもストレングス部分が強化されれば、QOL を向上させる要因になりうるし、逆になれば QOL を低下させる要因になりうる。

これらの成果における新たな知見とは、患者の生活全体における変化を捉えるシステム思考やエコロジカルな視点に基づき、ストレングスを発揮するための取り組みをソーシャルワークの考え方及びプロセスに沿って明らかにできた点にある。

上記の調査結果及びこれまで研究者が行ってきた大腿骨骨折を経験した高齢者への基礎的研究の結果を踏まえて、退院支援におけるソーシャルワーク実践モデルを検討した。具体的には、モデルの全体像を図式化すると共に、実践マニュアルを作成した。実践マニュアルには、アセスメント及びプランニングの視点や、介入・退院支援計画策定の留意点等を盛り込んだ。さらに、回復期病棟に勤務する MSW へのインタビュー調査結果も踏まえると、大腿骨骨折を経験した女性高齢者への支援のポイントとして、①家事に関するサービスや支援、②情緒的な支援、③趣味活動や社会との交流の支援の 3 点を重点的に行う必要があることが明らかになった。

例えば、①家事に関するサービスや支援については、家事全般のサービス導入・調整や、散歩や買い物、受診時の移送等といった退院後の屋外活動に関するサービス導入・調整、受傷前の家事役割を維持するためのサービス導入・調整等が特に必要である。②情緒的な支援では、再転倒の不安・恐怖の訴えを受けとめることや、骨折を機に従来担っていた家庭内役割を果たせなくなることへのもどかしさ・情けなさ・同居家族への気遣いなどの想いを傾聴すること、痛みや疲労感の訴えを受けとめることなどが、高齢女性患者においてニーズが高いため、支援が必要である。③趣味活動や社会との交流の支援については、生活の中で楽しみ・趣味活動を見つける手助けや、受傷前に構築されていた近隣住民等と交流機会といった社会活動への参加の維持に配慮した支援が、特に高齢女性患者では重要となる。

以上のことから、本研究では大腿骨骨折を経験した高齢者に対して MSW が行う退院支援のソ

ーシャルワーク実践モデルを作成し、特に高齢女性患者への効果的な支援とその方法を提示することができた。

＜文献＞

遠藤直人編（2015）『大腿骨近位部骨折ゼロを目指す治療・予防戦略～多職種連携による取り組み～』医療ジャーナル社.

畑香理（2021）「大腿骨骨折を経験した高齢者の語りからみる生活課題とストレングスの特徴－入院から退院後の在宅生活を中心に－」『福岡県立大学人間社会学部紀要』30（1），35－50.

一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会（2018）『平成 29 年度　回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書』.

小原眞知子（2004）「我が国の要介護高齢者の退院援助におけるソーシャルワーク実践にみられる今日的問題」『久留米大学文学部紀要』4，55-76.

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法　原理・方法・実践』新曜社.

坪井真幸・長谷川幸治・鈴木貞夫（2004）「大腿骨近位部骨折の長期予後」『総合リハビリテーション』32（10），947-50.

八重樫由美（2015）「日本の大腿骨近位部骨折発生率－2012 年における新発生患者の推定と 25 年間の推移－」『骨粗鬆症財団ニュース』26，1.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 畑　香理	４．巻 30
２．論文標題 大腿骨骨折を経験した高齢者の語りからみる生活課題とストレングスの特徴ー入院から退院後の在宅生活を中心にー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	６．最初と最後の頁 35ー50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 畑　香理
２．発表標題 大腿骨骨折を経験した高齢者の生活課題の特徴ー入院から退院後の在宅生活に焦点をあててー
３．学会等名 日本社会福祉学会九州地域部会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関